

恋愛と強権

いったい恋愛などを、恋愛とは何ぞやと鹿爪らしく問題にする必要はないのだけれど、理屈好きなら——ことに非自然的有閑の人物の多い世の中では、こういうことが大いに問題になる。同じく非自然的、有閑の人物を本位とするコミニズムの如き、その例えに洩れず、コミニズムはかく恋愛を定義するなどとする。私どもは恋愛にせよ、芸術にせよ、より多く「主張」というものはもたない。自然的發生に信頼し、その衝動に従うのみである。だが、現在のように、かかる恋愛は資本主義恋愛であり、かかる芸術は資本主義芸術である。そして唯かかる恋愛、かかる芸術のみが、共産主義恋愛ならびに芸術であるから、それこそが新しいなどといわれてみると、否、といわねばならないものを本能が感ずる。彼等は理論をさきこね上げることによって本能を従えようとする。これを社会的にいうと、少数の指導者が多数の民衆を踏台にするようなもので、はなはだ不自然、非自然なやり方だ。われらの先祖達は、恋愛とは何ぞやなどと考えてから恋愛しただろうか。

こういうことを考え出したのは、西洋の歴史でいうなら、民衆自治の社会生活がこわれて、ようよう集権、強権の世の中となった古代ギリシャ時代が最初であろう。

プラトニックラブとということがあるが、ギリシャのプラトンと称する哲人が「恋愛とは何ぞや。それはその目的を超自然的のところの有する純心霊的な交渉だ」といったのに基づいている。性欲などは恋愛ではない。それは卑小な自然的事実である。ただ生殖は国家のために必要だ、という見地において、彼プラトンは『レパブリカ』なる著述の中で、人民どもの生殖は彼等の好き勝手にさせてはならない。国家が干渉してくじ引きで配偶を定め生殖させ、生まれた子供は国営保育場で育てる。だから子供ができて、親は子を知らず、子は親を知らぬというのが理想であると考えた。

彼の恋愛観は、性欲および性殖とは何等の交渉なき、純精神的、純心霊的なものであった。

いったい集権、強権の世の中の考え方というものは、国家本位であろうが、社会本位であろうが、いずれにせよ五十歩百歩で、根底においては同じものである。世の中は進んだという。なるほど進みはしたろうが、政治、経済、芸術、教育、そのいずれにせよ、根本の考え方はプラトン以来少しも変わってはいない。そのように、恋愛観も変遷はしたが、結局プラトニックラブを出ない。

恋愛を否定する者がある。男女関係は性欲のみであると。それにしてもプラトニックラ

ブ観と変らない。何となれば、「恋愛は心霊的なもの」と考えている点において、プラトンと一致しているからだ。ただプラトンはそういう交渉が実在しうると考え、後者は実在し得ないというまでである。「恋愛というものは何かこう高尚なものだ」と定義している点において、両者は同じである。それでないなら、もし恋愛がそれほど高尚なものでも、神様のものでもないならば、「実在し得ない」などと鹿爪らしく開き直る必要はないからである。

ともあれプラトニックラブ観はその一面に功利的性欲ないし生殖観を併せ有している。人民どもの性欲、特に生殖は自然界に属しているものでなく、人民ども個人の有でもあつてはならない。人民どもの好き勝手にすべきものでなく、国家のために生殖しなければならぬというのである。国家とは何ぞや。洗ってみれば少数の支配階級のことだ。支配階級は人民どもの機械化を必要とする。その機械は機械である意味において多ければ多いほどよい。この意味においてのみ彼等は「出産」を歓迎する。あらゆる労働、あらゆる思想、それらすべてが、「国民」および「社会」の名における少数支配者どものためのものではない。この意味に於いてのみ彼等は「出産」を歓迎する。あらゆる労働、あらゆる思想、それらすべてが、「国民」および「社会」の名における少数支配者どものためのものではない。国家および社会のために有用な子供を生まらかすために、その行為が干渉されねばならない。

国家および社会のために有用な子供を生まらかすために、その行為が干渉されねばならない。

コミュニズム恋愛観は、コロンタイなどのように、ことさらに私事とし、押しやっているものと、新ロシアの何とかいう教師のように「人民どもは好き勝手に結合してはならない。階級的利便を目標とし、性は全然階級に従属し、それを助けるために、長い共同生活を営もうとする男女、あらゆる点で健康な男女のみが結合すべきだ」というものがある。この二つの恋愛観は、二つの違ったものであるようだが、その実、同種類の強権主義的恋愛観たるを失わない。

ことさらに軽蔑してみたり、性は階級に従属するといってみたり、ともあれ彼等は人民どもが、その各々の自然から与えられた生活に目覚めることによつて、人為的、後天的権力を否定するようなことのないよう、百万苦心焦慮のていである。

昔から坊さん達、御用学者達が、それと同じことを、どれほど言ってきたことか。彼等は性を軽蔑してみたり、制限した意味に於てのみ許してみたりした。強権主義者の恋愛観はかくの如き根本においていつでも同じものではある。

私どもにいわせるならば、人民どもが好き勝手に結合することが、即ちほんとうな意味において、生殖の自然であり、それであるが故に、結果において純優生学的でありうる。私どもは即ち「人民ども」の好き勝手に信頼し、それより他にほんとうの恋愛はあり得ないと思える。恋愛とは何ぞやと考え、その理論通りの恋愛を行わねばならないなどというのは御免である。

かくの如きことは自然がうまくしてくれる。我々の性は国家にも強権にも従属せず、自然に属している。というのは何ものにも属しないということである。

だが、現在のような強権社会では、恋愛観において右のように非自然的であるように、そのあらゆる政治的経済的の制度が、自然な恋愛を妨げている。ここに我々の恋愛生活面における戦いの基礎が置かれる。戦いはあらゆる面において成り立つ。そしてそれらの全てが、強権を否定するものであることによって、自由連合主義に合流するものであり、否、自由連合主義そのものである。

恋愛とは何ぞや。強いて我々の立場からこれを定義づけるならば「恋愛とは生殖行為の含む全ての現象である」と私は言いたい。それは性欲のみではない。性欲は盲目的であって、その衝動自身が満足すれば足りるとする。だが、我々は盲目的には性交しない。そこには好き嫌いがあり、美不美の感などがあって、好きと思ひ、美と感じた対象によって生殖の行為を営むのが順当であり、また事実でもある。これは独り人間のみでなく、すべての植物動物などが、ともあれ原始から現在の状態へまで発展し来たっているその道程をみつめると、そこには多くの生殖行為による選り分けや淘汰などが基礎になっている。つまり優生学的に自然が作用しているのである。

しかし、かくの如きことは、人間の頭で考える優生学的なものとは違う。それは極めて単純な、最も本能的な選択作用にまつものであろう。人間でいえば即ち好き嫌いというよ

うな原始的な感情こそ生殖行為を支配するものである。この意味において、恋愛とは性欲のみをいわない。性欲をも、選択本能をも、また相互の交感の中に潜む一種崇高な、故にいわゆる心霊的な美感等のすべてを含むものが恋愛である。即ち生殖行為の含むすべての肉体的精神的現象がこれである。そして恋愛は現代において素直に生かすことができなくされている。自由に生殖が営まれず、また、あらゆる意味において、その生殖の結果が、強権的に干渉され、支配され、生物および人間としての自然が踏みにじられるからである。

恋愛問題等は社会問題には関連しないように思う人があるが、どうして、どうして、この方面にも、自覚すればする程、大きな矛盾があり、そして強権否定の強い希望があるのだ。